2017 決定

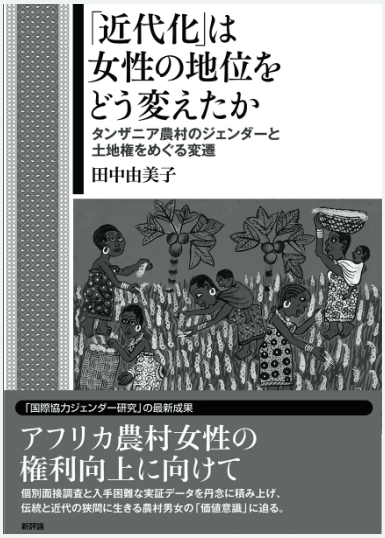
第２１回
国際開発研究 大来賞

OKITA Memorial Prize for International Development Research

一般財団法人 国際開発機構 FASID

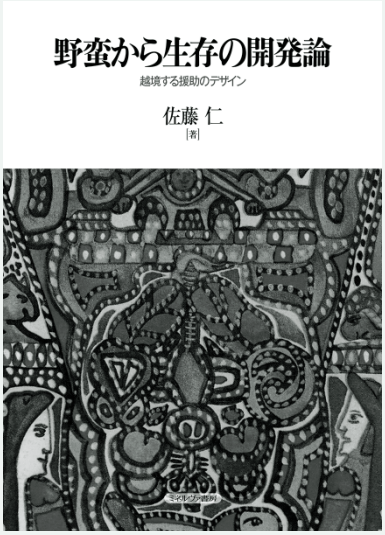
「国際開発研究 大来賞」は、多様化する国際開発のニーズに対応し新たな指針を提示する研究を奨励するため、当財団の初代評議員会会長を務められた元外務大臣 大来佐武郎氏を記念して、1997年に創設されました。

第21回（2017年度）の受賞作品が下記の通り決定しましたのでご紹介します。



田中 由美子 著

『「近代化」は女性の地位をどう変えたかータンザニア農村のジェンダーと土地権をめぐる変遷』（新評論）2016年



佐藤　仁 著

『野蛮から生存の開発論ー越境する援助のデザイン』（ミネルヴァ書房） 2016年

これまでの受賞作品

第１回　廣瀬昌平・若月利之編著『西アフリカ・サバンナの生態環境の修復と農村の再生』農林統計協会　1997年
　　原　洋之介著『開発経済論』岩波書店　1996年
第２回　絵所秀紀著 『開発の政治経済学』日本評論社　1997年
　　深川由起子著『韓国・先進国経済論 －成熟過程のミクロ分析－』日本経済新聞社　1997年
第３回　中兼和津次著『中国経済発展論』有斐閣　1999年
　　辻村英之著 『南部アフリカの農村協同組合 －構造調整政策下における役割と育成－』日本経済評論社　1999年
第４回　峯　陽一著 『現代アフリカと開発経済学　市場経済の荒波のなかで』日本評論社　1999年
第５回　黒崎　卓著 『開発のミクロ経済学』岩波書店　2001年
　　西川　潤著 『人間のための経済学－開発と貧困を考える』岩波書店　2001年
第６回　石井正子著 『女性が語るフィリピ ンのムスリム社会』明石書店　2002年
　　脇村孝平著 『飢饉・疫病・植民地統治－開発の中の英領インド』名古屋大学出版会　2002年
第７回　平野克己著 『図説アフリカ経済』日本評論社　2002年
第８回　石井菜穂子著『長期経済発展の実証分析』日本経済新聞社　2003年
　　安原　毅著 『メキシコ経済の金融不安定性』新評論　2003年
第９回　藤田幸一著 『バングラデシュ農村開発のなかの階層変動：貧困削減のための基礎研究』京都大学学術出版会　2005年
第10回　谷　正和著 『村の暮らしと砒素汚染－バングラデシュの農村から』九州大学出版会　2005年
第11回　湖中真哉著 『牧畜二重経済の人類学－ケニア・サンブルの民族誌的研究』世界思想社　2006年
第12回　牧田りえ著 『Livelihood Diversification and Landlessness in Rural Bangladesh』The University Press Limited　2007年
第13回　武内進一著 『現代アフリカの紛争と国家 －ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』明石書店　2009年
第14回　田辺明生著 『カーストと平等性 －インド社会の歴史人類学』東京大学出版会　2010年
第15回　該当作なし
第16回　佐藤百合著 『経済大国インドネシア－ 21世紀の成長条件』中央公論新社　2011年
第17回　森　壮也・山形辰史著『障害と開発の実証分析 －社会モデルの観点から』勁草書房　2013年
　　山尾　大著 『紛争と国家建設－戦後イラクの再建をめぐるポリティクス』明石書店　2013年
第18回　柳澤　悠著 『現代インド経済－発展の淵源・軌跡・展望』名古屋大学出版会　2014年
第19回　古川光明著 『国際援助システムとアフリカ－ポスト冷戦期「貧困削減レジーム」を考える』日本評論社　2014年
第20回　宮城大蔵編著『戦後日本のアジア外交』ミネルヴァ書房　2015年

田中 由美子 著
『「近代化」は女性の地位をどう変えたか－タンザニア農村のジェンダーと土地権をめぐる変遷』 （新評論）

審査委員選評

本書は、タンザニア農村の土地所有制度に着目し、農村女性の土地にかかわる諸権利について丹念な実証的調査を行い、ジェンダーの視点から開発政策・事業への示唆を考察した労作である。

著者の田中由美子氏は、国際協力機構（JICA）でジェンダー専門家の草分けとして長年第一線で活躍してきた。それゆえ、フィールドで培った知見にもとづき、世界銀行などで広く受容されている「女性が土地を所有すればエンパワーされ、経済的自立につながる」という土地権の近代化論に対して疑問をもち、仮説を立て、ケーススタディを通じて検証を試みるという、意欲的な研究が生まれたのだろう。

本書の優れている点として、3つあげたい。第1に、キリマンジャロ州ローアモシ灌漑地区を対象に1845人の土地所有者のデータを収集し、農村女性による土地の自己名義登録や、（営農権・収益権・処分権利を含む）土地の管理権の経時的変化をたどるなど、詳細な調査を行っていること。（なお、ローアモシ灌漑地区は、1980年代に円借款で稲作圃場や畑地圃場を造成し、その後もJICA専門家によるイネの栽培技術指導や無償資金協力による精米所建設を行うなど、タンザニアにおいて日本が長年、農村近代化を支援してきた地域でもある。）

第2に、農村女性たちが「価値あると思うこと」に焦点をあてた聞き取り調査を行い、既存のジェンダー平等論を超えて、質的に深みある聞き取り調査をしていること。第3に、比較分析の視点を交え、土地権の近代化論をふまえたアプローチを採用したケニア・ウガンダ・ジンバブエや、大規模灌漑事業を通じたスリランカの土地配分の結果と対比しながら、タンザニアのケーススタディの位置づけを明確にしていること、である。

本書はオーソドックスな研究手法を採用しているが、JICA事業で培ったネットワークを活かした土地権データの収集・分析や、現場感覚ある提言が散りばめられており、学術性と実践の両方を兼ねそなえた魅力的な研究になっている。また導入部分に、開発理論の変遷とジェンダー平等論を関連づけた概観があり、初心者にとっても分かりやすい内容になっている。土地を所有することに対する価値観が男女でどう違うか。本書が問いかけた視点は、タンザニアだけでなく、日本においても検証に値するのではないだろうか。 （大野 泉）

受賞者の言葉

このたびは、栄誉ある国際開発研究大来賞を受賞させていただき有難うございました。この場をお借りし、FASID及び審査員の方々、出版にご尽力くださった新評論の方々、本書のもととなった論文を指導してくださった東京大学の山路永司先生、東京大学社会科学研究所大沢真理所長、及びご助言いただいた城西国際大学原ひろ子先生、一橋大学伊藤るり先生、ご支援いただいた国立女性教育会館(NWEC)の皆様、並びにタンザニアで現地調査にご協力くださった国際協力機構(JICA)専門家の富高元徳氏、大泉暢章氏を初めとし、現地調査にご協力いただいたタンザニアの方々、JICA職員、国際協力専門員の皆様、その他紙面の関係上、お名前を挙げられない全ての方々に心より感謝申し上げます。

私は、過去30年以上、国連機関及びJICAにおいて国際協力とジェンダーの分野に従事してきました。国連ESCAPにおいては、アジア太平洋地域の国々とともに、ジェンダーと開発に関わる諸問題に挑戦し、困窮している女性たちの経済状況の改善、性暴力の廃絶のための地域事業の展開、国家政策におけるジェンダー指針の策定や統計・情報整備などに尽力してきました。1990年からはJICAにおいて二国間政府援助という枠組みにおいて、アジアのみならずアフリカや中近東などの国々におけるジェンダーの諸課題に取り組んできました。

なかでも1994年から2年間、ネパール村落開発・森林保全プロジェクトのジェンダー専門家として、住民参加型開発に従事したことは、大きな転機となりました。このプロジェクトを通じて、山間僻地において住民に寄り添った、住民主体の開発とは何か、という開発の根源的な問いに身を持って体験することができたことは、その後の自身の活動に大きな影響を与えました。（また、そこで体験したことの一部は、FASIDのケースブックにもなりました。）

2007年にタンザニアに出張し、そこで初めて北部キリマンジャロ山のふもとで、日本政府及びJICAが20年以上も灌漑稲作の支援をしていることを知りました。従来、フェミニスト研究者たちにより、大規模開発地への入植や再定住などの「近代化」プロジェクトが実施されると、女性の経済手段や慣習的な土地権が奪われ、女性の地位が低下するという批判が繰り返されてきました。そこで、キリマンジャロ州においても、それを検証したいと思うようになりました。そして、ネパールで体験した女性の目線に立った主体的な開発が、どのように可能なのかについて追求してみたいと思い本研究をすることになりました。本研究では、女性の目線を、女性が価値あると思うこと、という用語で表してみました。

この研究成果は、既に2つの学会誌に英語論文として掲載し、2017年にはワシントンにおいて世界銀行が主催する土地と司法制度に関するセミナーでも発表しました。2018年には、タンザニアにおいてプロジェクト終了に向けた成果発表セミナーが開催される予定ですので、その場でも発表し、タンザニアの研究者及び関係者の方々のフィードバックを得たいと思っています。本研究の成果が、より良い開発に向けた一助になることを期待しています。

田中 由美子

たなか ゆみこ
1951年神奈川県生まれ。国際基督教大学、マンチェスター大学院経済社会学科修士、東京大学国際協力学博士号(2014年)。国連工業開発機関(UNIDO)、国連アジア太平洋地域経済社会委員会(UN-ESCAP)、国際協力機構(JICA)国際協力専門員、評価監理室長、社会開発協力部長等を経て、2017年9月より城西国際大学招聘教授。専門：ジェンダーと国際協力。国連ウィメン日本協会理事、男女共同参画と災害・復興ネットワーク運営委員、ケア・インターナショナル・ジャパン理事等歴任。

主要著書
『開発とジェンダー：エンパワーメントの国際協力』（共編著、国際協力出版会、2002）。*Transforming Gender Relations in Disaster Risk Reduction: Case Study on the Philippines and Sri Lanka.*（2016）JICA and Georgetown Institute for Women, Peace and Security, Washington D.C.(Co-author).『はじめてのジェンダーと開発』(共編著、新水社、2016）他。

第21回 応募作品の傾向と選考経緯

2016年4月から2017年3月までに出版された国際開発分野における課題を主たるテーマとした日本語の研究図書を対象として公募したところ、33件、31作品の推薦・応募があった。

本年度の特徴は、対象地域としては一国のみではなく、複数の国/地域を取扱う著作が多い点である。アジア・ASEANを取扱う作品は引続き多く、増加傾向にあった中国関係は1作に減じた。アフリカ、中東、欧州、ラテンアメリカを取り上げた作品が各1から2作あった。

分野については、開発一般5作、経済/財政6作、社会開発（その他）5作などが、例年同様に割合が多かった。環境/資源関連が5作あり、特に資源分野の増加が今年の特徴であった。昨年は無かった災害/防災/難民および教育は、各1作あった。

FASID国際開発研究センターにおいて予備審査を行い、受賞作品に加えて3作が最終審査対象として選出された。

審査委員からは、「開発問題に正面から取り組んだ、重量級の本が多かった。」と総評が出された。審査過程における委員による意見はおおよそ次のとおりである。（書名五十音順）

『開発援助アジェンダの政治化－先進国・途上国関係の転換か？』（増島 健 著、晃洋書房）は、開発援助の歴史的な経緯を含め、特に

佐藤　仁 著
『野蛮から生存の開発論－越境する援助のデザイン』　（ミネルヴァ書房）

審査委員選評

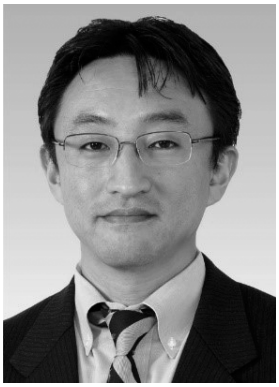
読者に「開発研究の面白さ」を伝えたいというのが本書の目的であり、そもそも「開発研究」という領域が「学問として成り立つのか」という問いかけに答えたいというのが筆者の思いである。本書は「第Ⅰ部　開発・援助の知的技術」、「第Ⅱ部　開発・援助の想定外」、そして「第Ⅲ部　開発・援助と日本の生い立ち」の3部から成り立っており、さまざまなテーマを取り上げながら、開発の意味や技法、そして開発研究という学問のあり方について縦横無尽に論じたエッセー集である。

本書の魅力は、なんといっても「開発研究」というテーマも方法も確立していない領域に果敢に取り組んだ点にある。「開発研究」の特徴は、開発にかかわる「さまざまな問題の発見」と「課題の解決」を求める点に特徴がある。「問題」が先で「方法」が後という学問領域であるため、既成のディシプリンを機械的に応用するのではなく、問題の発見と同時に分析方法自身をも模索せざるをえない。なんともやっかいな研究分野である。本書の第Ⅰ部と第Ⅱ部で、筆者はアマルティア・セン、アルバート・ハーシュマン、ジェームズ・スコットといった「越境人」の議論から得られたインスピレーションを批判的かつ精力的に吸収し、生活の質の評価、事例分析の意義、分業のもたらすリスク、「想定外」による開発の失敗、被災者へ援助物資の分配方法、「資源の呪い」の克服手段といったさまざまなテーマを取り上げている。どの章からも、従来見過ごされてきた開発にかかわる重要な論点が浮かび上がってきており、見事である。

第Ⅲ部でとりあげたテーマは、Ⅰ部およびⅡ部とは関連はなく、我が国の援助史・援助体制をとりあげたものである。1950年代に着目し、「賠償に先立つ経済協力」あるいは「復興を中心に見据えた経済協力」という理念の系譜をえぐり出した点は、歴史研究としても見るべきものがある。

本書は開発研究の一つのすぐれた出発点として高く評価できる。筆者には、今後さらに分析概念に磨きをかけてわが国の開発研究を新たな高みへと飛躍させてくれることを期待したい。　（絵所 秀紀）

受賞者の言葉



「大来佐武郎」の名を冠した伝統ある学術賞受賞の報に触れ、心から喜んでおります。私の近年の研究は、大来の仕事と生き方をたどるようなものでした。前著『「持たざる国」の資源論』（東京大学出版会、2011年）では、日本が援助の「受け手」であった1950年代前半までの資源問題、特に大来とGHQの技術顧問であったエドワード・アッカーマンとの交流の結果として生まれた資源委員会の意義を跡付けました。米国の公文書館で見つけたアッカーマン宛の大来の書簡を読んで印象的だったのは、大来の英語力の高さと、日本製の便せんのもろさでした。便せんの紙質にみる圧倒的な日米格差に私は当時の日本の貧しさを重ね、同時に文面にみなぎる明日への希望を感じたのでした。

今回の本では、そんな貧しさの中で日本が経済協力の「送り手」に回りはじめた1950年代中ごろ以降の大来の対外的な活躍に注目しています。かくも短い期間に、戦後日本経済の立て直しと途上国への経済協力がありました。

問題は、大来の足跡から何を学ぶかです。私は、日本が自らの復興経験を踏まえて如何に援助供与国への転換を果たしたのか、というテーマを理念的、組織論的に再検討し、そこから現代への政策的示唆を導出することが大来の残した宿題の一つであると考えました。今回の受賞作では日本援助の問題点として批判されてきた「理念の欠如」と「司令塔の欠如」に焦点を合わせ、それぞれの「欠如」が何か積極的な役割を果たしてきたのではないかという大胆な仮説を示してみました。

大来の生き方から学ぶことは、他にもあります。中でも開発問題に接近する際の「専門性」の在り方は重要です。「なんでもいいから一つ専門をもて」は開発分野を志す若手に向けて発せられる常套句となりました。しかし、専門性のマスターに汲々としているうちに、真ん中に見据えるべき問題が置き去りにされる、あるいは方法論の呪縛に囚われるあまり、知的なワクワク感がそぎ落とされるようなことはないでしょうか。東京大学工学部で電気工学を学んだ大来は、後に「エコノミスト」に文転しました。何を専門に学んだのかではなく、学んだことを生かしてどのような仕事を残したのか、を問うべきです。

世界をリードする米国の学問状況と比べて日本の良いところは、まだ個別科学（ディシプリン）による支配が行き届いていないところ、つまり問題の性質に合わせて方法を組み合わせる余裕が保全されている点にあります。私は、開発経済学でもなく、開発政治学でも開発社会学でもない、開発学そのものを提示する試みとして今回の受賞作を執筆いたしました。

大来が日本の復興と途上国への経済協力という二つの分野で続けざまに活躍できたのは、決まった「ディシプリン」に縛られることなく、時代の求めに応じて巧みに適応する身のこなしに長けていたからだったのかもしれません。現代世界は、1950年代以上にすさまじい速さで変化しています。それに対応できる開発研究とはどのようなものか、私たちが大来から学ぶべきものはまだまだありそうです。末筆ながら、私の拙い本を取り上げてくださった選考委員の先生方に深く感謝いたします。　佐藤　仁

さとう じん
1968年生まれ。東京大学東洋文化研究所・教授（総長特任補佐）、プリンストン大学ウッドロー・ウィルソンスクール客員教授。第10回（2013）日本学術振興会賞および日本学士院学術奨励賞を受賞。

主要著書
『「持たざる国」の資源論―持続可能な国土をめぐるもうひとつの知』（2011年、東京大学出版会）。『稀少資源のポリティクス―タイ農村にみる開発と環境とはざま』（2002年、東京大学出版会）。*The Rise of Asian Donors: Evolution of the Emerging Donors and the Impact of Japan.* Routledge（共編著）他。

欧州からの視点を取り込んで読み解いている。民主化支援と良いガバナンスの違い、それらが開発援助に登場することになった経緯他、改めて考える契機となる。近年、開発援助と安全保障との関係が一層緊密になっており、本著の分析は重要な知的基盤となろう。

『市場を織る －商人と契約：ラオスの農村手織物業』（大野 昭彦 著、京都大学学術出版会）は、経済学の教科書的な市場ではなく、生産者と消費者をつなぐ市場が実際にどのように形成され、間をつなぐ「商人」にはどのような役割があるのかが、手に取るようにわかる。長年にわたる地道な研究の蓄積をもとに取り纏められた力作である。

『農村景観の資源化－中国村落共同体の動態的棚田保全戦略』（菊池 真純 著、御茶の水書房）は、農村景観を含め、当事者が意識しない「資源」に着目し、世界各地におけるその活用法を検討した。この点は、今後の開発研究においてさらに推進させられるべきであり、本著はその意味で普遍的価値がある。

【第21回（2017年度）審査委員会】　委員長　杉下　恒夫（FASID理事長）
委　員　荒木　光弥（国際開発ジャーナル社代表取締役・主幹）
絵所　秀紀（法政大学教授）　大野　泉（政策研究大学院大学教授）
滝澤　三郎（認定NPO法人国連UNHCR協会理事長、東洋英和女学院大学院客員教授）
岡田　尚美（FASID専務理事）

2018 募集

第22回 国際開発研究 大来賞

OKITA Memorial Prize for International Development Research

受賞候補作品 募集のご案内

「国際開発研究 大来賞」は、国際開発の分野における研究奨励と促進、良書の発掘に資するため、国際開発の様々な課題に関する優れた指針を示す研究図書を顕彰するものです。第22回（2018年度）についても、皆様からのご推薦・ご応募をお待ちしております。

対象となる作品

(1) 開発援助を含む国際開発の分野における課題を主たるテーマとする日本語の研究図書であって、国際開発の実践活動の向上に資するもののうち、特に斬新性、普及性の点で顕著な業績、貢献が認められるもの（翻訳、随筆、エッセイ、体験記、自伝、紀行文、事業報告書等を除く）。

(2) 個人又は団体が編者あるいは著作者の場合は、個人の執筆者名が明記されているもの。

(3) 2017年4月から2018年3月迄に、初版が国内で市販されたもの。

審査・表彰

表　彰　　審査委員会で選考された作品に対し、正賞（楯）と副賞（50万円）を贈呈します。

審　査　　当財団国際開発研究センターによる予備審査を経て、審査委員会が行ないます。

推薦・応募　推薦者（自薦・他薦可）は、所定の「推薦書」へ入力し、email添付により送信とともに、当該図書2冊を添えて応募・推薦して下さい。なお、推薦書類・当該図書は返却致しませんのであらかじめご了承下さい。

締　切　　2018年6月22日（金）

受賞作品の発表と表彰式　　2018年11月に推薦者へ通知、発表し、表彰式を行います。（予定）

推薦書ダウンロード・推薦・お問合せ先　　下記事務局へお送り下さい。http://www.fasid.or.jp/award_detail/2_index_detail.shtml

大来 佐武郎（おおきた さぶろう）氏

一九一四年旧満州大連市に生まれる。一九三七年東京帝国大学工学部卒業、逓信省入省。戦後は経済安定本部、経済企画庁においてエコノミストとして活躍。一九六三年に同庁総合開発局長退官、一九六四年日本経済研究センター理事長就任、南北問題や開発援助分野で活躍。国際開発計画委員会（ティンバーゲン委員会・ピアソン委員会）の委員や『成長の限界』を刊行したローマクラブのメンバーを務める。一九七一年国際開発センター理事長、一九七三年海外経済協力基金総裁等を歴任、一九七九年の大平政権において外務大臣を務める（～八〇年）。その後も国際大学学長、対外経済問題諮問委員会座長、FASID初代評議員会会長、国際開発学会会長等、国際開発分野で数多くの足跡を残す。一九九三年逝去。

第21回 表彰式・記念講演会　ご案内

手話通訳 あり　　案内状 http://www.fasid.or.jp/award_detail/3_index_detail.shtml

2018年2月1日（木）15：00～17：00

FASIDセミナールーム
（東京都港区麻布台2-4-5 メソニック39MTビル6階）

「近代化」は女性の地位をどう変えたか ータンザニア農村のジェンダーと土地権をめぐる変遷　田中 由美子

慣習的な土地法や既成概念に阻まれ、女性が土地を自己名義で所有・相続することは難しい。一方、タンザニアの農村では、女性の土地権が経時的に増加している。女性たちは、幾多の弊害を乗り越えつつも、押し寄せる「土地権の近代化」の波に乗り、自らの手に土地の権利を獲得してきている。女性たちの土地権の向上は、貧困削減だけでなく、女性のエンパワーメントの達成にも大きく寄与している。
「ジェンダー視点に立った国際協力」が一層、求められている昨今、本研究の成果を通じて国際協力に関わる研究者・実践者にとって今後何が求められているのかを、一緒に考えていきたい。

開発研究の和製化を考える　佐藤　仁

国際開発のキャリアステップとして英米の開発学大学院に留学することは定石になっています。他方、日本の国際開発大学院は海外からの留学生が大部分を占めています。ならば日本人が日本の大学院で開発を勉強する意味は、どこに見出されるか。また、そこで学ぶべき開発学とはどのような特徴を備えたものであるべきか。いまだに欧米のトレンドを追いかける日本の開発研究を真に和製化し、世界に提示する可能性について拙著を踏み台に考えます。

参加費　　無料（要申込み）　　※式典・講演に続いて懇談会を同会場で催します。

申込み　　お名前・ふりがな、ご所属、電話（昼間連絡できる先）を下記事務局へemailにてお送り下さい（手話通訳の必要な方は、記して下さい）。

締　切　　2018年1月30日（火）　それ以前でも会場定員になり次第、締切らせて頂きます。

本事業実施には、公益財団法人 三井住友銀行国際協力財団による助成を受けています。

一般財団法人 国際開発機構
国際開発研究センター
国際開発研究 大来賞 事務局（服部）

〒106-0041 東京都港区麻布台2-4-5 メソニック39MTビル6階
Foundation for Advanced Studies on International Development
email:okita@fasid.or.jp TEL:03-6809-1997 FAX:03-6809-1387 http://www.fasid.or.jp